

男鹿市門前のナマハゲ

——「雪国の来訪神」採訪資料1——

高橋 六一

はじめに

日本には来訪神あるいはマレビトと呼ばれるものに対する、一つの信仰がある。なかでも東日本の、特に雪国にはその民俗・祭儀についての特性が見られる。それを個別的に採集記録したものは、これまでも多くある。だが、それらを総合的多角的視野にたつて研究したものは、あまり見受けられないと言ってよい。そこで、そうした採訪・考察をふまえて、日本の古代文化の基層にあるものを見直してみたいと志したことがある。もはや五、六年を越える頃のことである。

そして今日までに得た採訪結果は、すべてを網羅するにはほど遠いが、それでも相当の量に達している。本稿はその一つである。なるべく現状に忠実でありたいと心がけたため、以下に見られるような体裁をとることとした。ことに聞き書きの部分は、話者の語り口を生かそうと努めたつもりである。ただ、話の順序は項目ごとに編成しなおしてある。そして、話の展開のために発した質問は、最少限にとどめて

() 内に片かなで記してある。

この採訪にあたって御協力をいただいた、現地の秋山佐市さん・菅原常雄さんと両家の御家族、そしてナマハゲとともにあがりこんだ先の各家の方々に、失礼のお詫びとおもてなしの御礼とを申しあげる。

また、事前事後に貴重な御教示や資料提供をいただいた秋田県民俗学研究会の斎藤寿胤氏、男鹿市役所商工観光課、秋田県立博物館にも深謝申しあげる次第である。

なお、参考までに採訪状況を略記しておく、次のとおりである。

◎採訪地 秋田県男鹿市船川港門前(図、写真1参照)

◎日 録

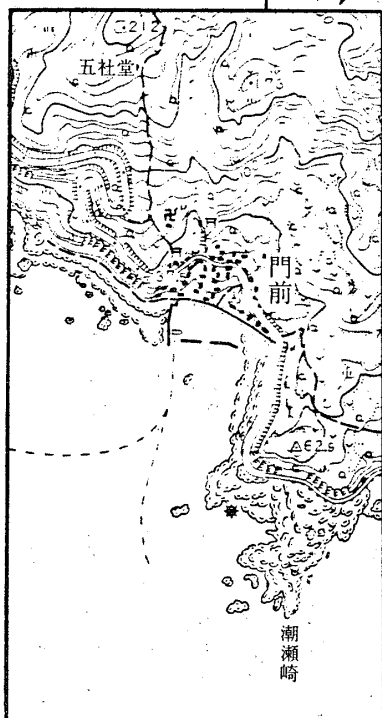
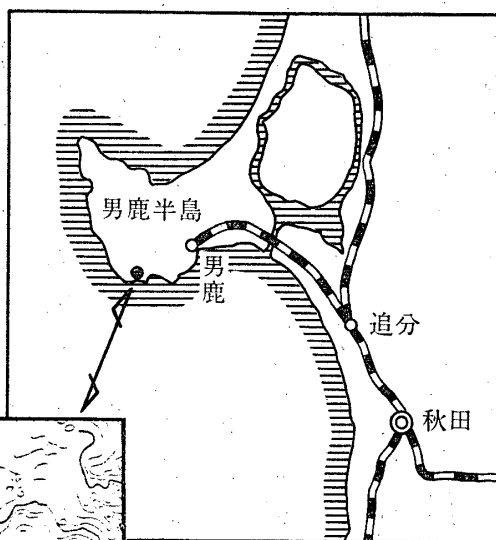
昭和五十四年十二月三十一日(月)

8..58 秋田駅発(男鹿線)(雨)

10..10 男鹿駅前発(バス)

10..50 門前着(風雨)

旅館「磯の家」にて休憩、天候の回復を待ちつつ採訪準備



15:05 追分駅着

1 五社堂まで

村のほぼ西端に赤神社の里宮(?)がある。その傍に「赤神岳 本山赤神社社殿復興碑」が建っている。それによって神社の縁起をほぼ知ることができるので、次に写し記しておく。

出羽の北端 兀として海に浮ぶ天立つ赤神山 神仙飛来して 漢武 五鬼の伝説を生み 斉明紀に所謂 齧田の浦 恩荷の抛るところとなつた 貞観の年 天台の盛時 大聖智識来往して 日積寺永禅院が創建せられ 比叡に模して九箇寺四十八坊が在ったという 明徳二年二十九世頼母代に 真

14:25 五社堂行 (16:50) (曇・風)
18:30 ナマハゲに付いて廻わる (21:00)

昭和五十五年一月一日 (火)
8:50 朝食 (曇・時に小雪)

聞き書き

13:20 門前発 (バス)

14:20 男鹿駅発

言宗に改められた 此神領は阿部貞任以来 平泉藤原三代を経て 鎌倉時代 橘公業に及び 北条 足利期に亘り秋田氏に至って 神田の寄付七百二十石と称せられた 慶長七年 佐竹氏の遷封と 変り 元和寛政以後に又 藩主の庇護を得て 社殿の修理が行はれた 而し年を経て腐朽廃されるもの 又多くなった 斯くして 明治維新の变革は 真言兩部神道を分離し 一は赤神社に永禅院主改め 元山宮司となり 他は末寺の長楽寺吉祥院に 仏法を

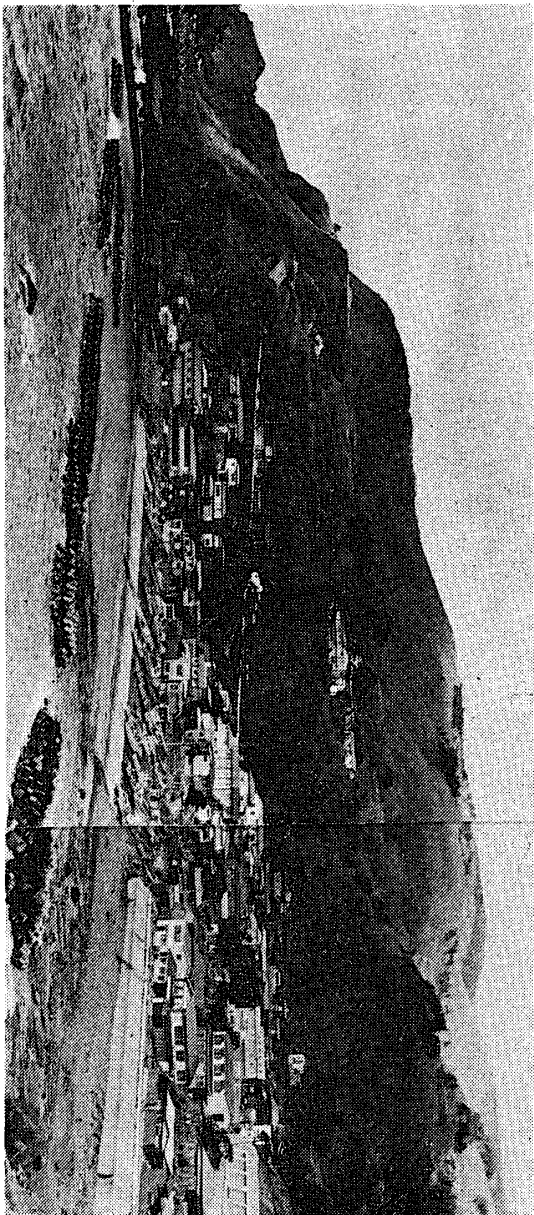


写真1 門前の風景

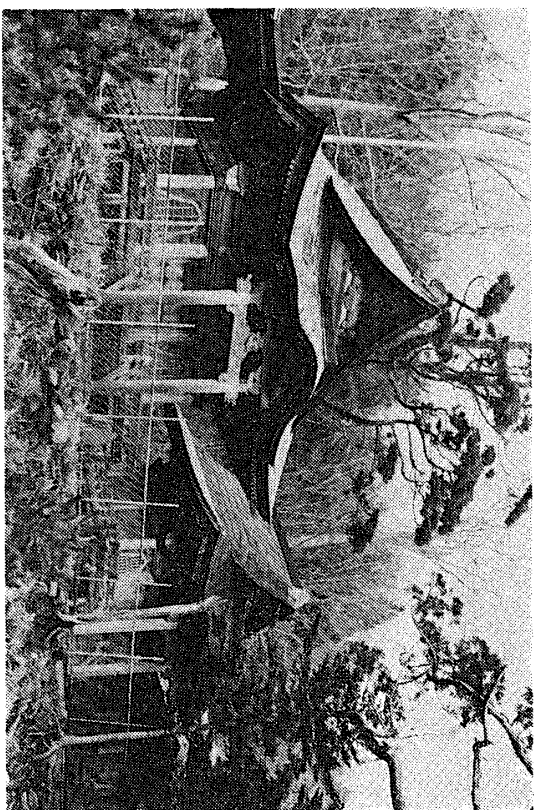


写真2 五社堂



写真3 ナマハダ

伝統せられたが 長年營繕を絶った堂社は漸次荒廃し 永禪院
 柴燈堂 食堂等凡て潰え 更に五社堂正殿の古代建築である内陣
 も 風雨に冒されるに至った 然るに 神威昌昌 昭和二十六年
 境内周辺の国有林十二町歩余が 無償譲与になった 氏子一統相
 計り 樹木の一部を売却し又浄財を募り 六百余万円を費し 予
 ての宿願であった 五社堂仁王門の修復 拜殿社務所の新築を成
 し 併せて六町余の急坂を改修した 是れ実に二百五十年來の盛
 事であり 神靈の顯示であることを深く信ずる

昭和二十七年七月十五日

本山赤神社氏子 工事委員

敬白

書(原文旧漢字)は井上廣居氏、宮司は元山榮太郎氏である。

参道を少し登ると長楽寺があつて、近くが小公園になっている。そ
 こから村も海も見わたすことができる。北西の風が強吹きつける。
 鉛色の雲、そして海も薄黒い。はるか水平線のあたりが一瞬明るくな
 って、海面の一部に日が差す。雲の切れ間から縦に、光の束が金色
 に輝く様は、鬼が渡り来るのかと思わせる。その示現のさやぎのよう
 に、霞が激しくぶつかってくる。

桜や樺など、すっかり葉を落した裸木の道を、ゆっくりと二十分ほ
 ど登ると、木々に囲まれて、五社堂(写真2参照)が鎮座する。あたり
 は人影もなく静かである。突然、鳥のはばたきに肝を冷やす。雉子が
 五羽、飛立っていった。そのうちの一羽は雄である。夕暮れ前の鳥の

遊びを、こちらがかえって驚かしたことになるのか。

下り道で三人の村の青年に出会った。めいめいが手に小さな御幣を
 持っている。これから五社堂にお参りに行くのだという。青年会長の
 家を尋ねて、ちょっと挨拶する。ナマハゲは夕方五時半に会館に集
 合、六時に長楽寺で祈禱をしてもらってから、家々を巡るといふこと
 だ。時は確実に近づいている。

2 ナマハゲの訪れ

○里宮にて(写真3参照)

午後六時二十六分、ナマハゲが下って来る声がする。

「ウーッ」

「ウオーッ」

「ウワーッ ウワーッ」

見物人やカメラマンが何人か待機している。ナマハゲの氣勢はまだま
 だあがらず、単一的に時々声をはりあげてみている。やがて付人役の
 合図で荒々しく拜殿内にあがり込み、宮司家の居室であばれている。

「ナマハゲ、騒げ〜、ほらッ」

と、けしかけられて、次第に声高になってゆく。一段落したところ
 で、宮司から酒食をふるまわれる。

「娘はどこへ行ったーッ、娘はッ」

「ウオーッ」

「ワアーッ〜」

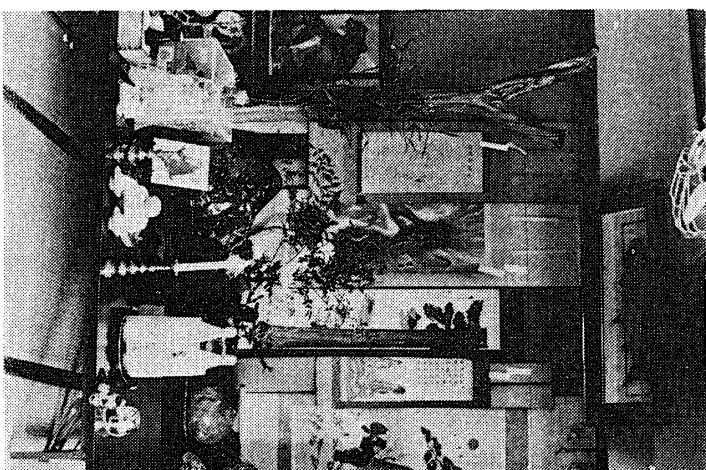
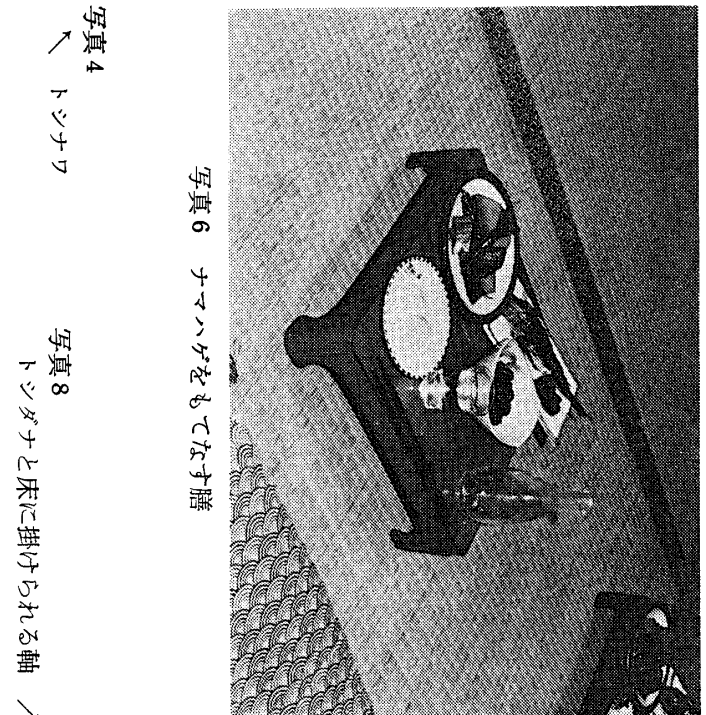
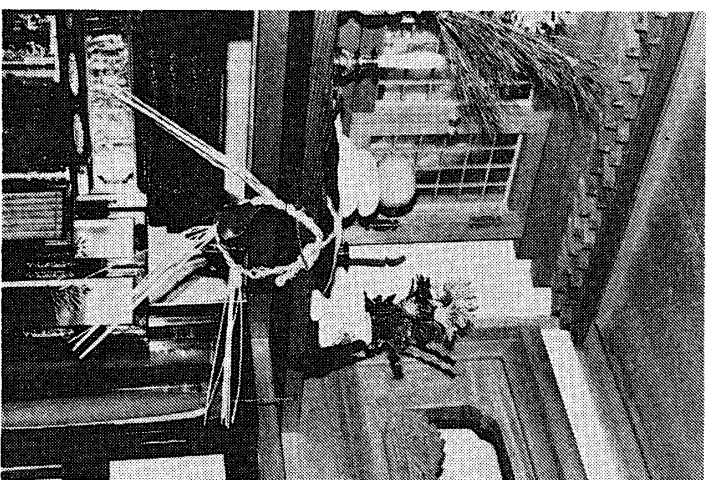


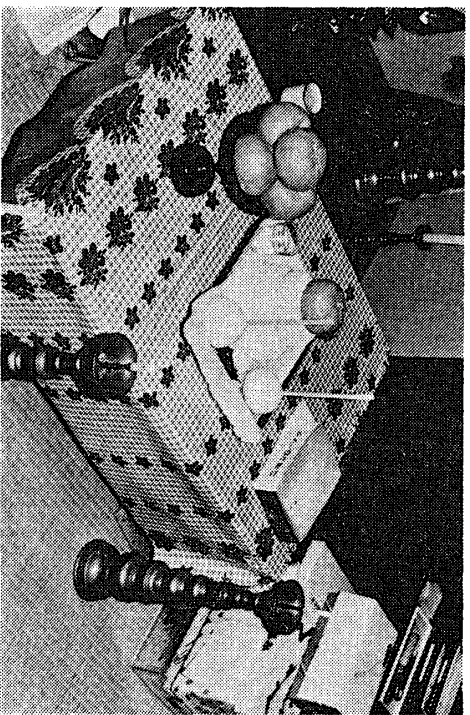
写真6 ナマハゲをもてなす膳

写真4

トシナク

写真8

トシダナと床に掛けられる軸



鏡餅とニガメシ

写真5

ナマハゲの餅(角型)とナムカエの
神供

写真7

ようやく元気づいて、初め六人だったのが三人ずつ二組に分かれ、一組は街道沿いに、一組は海岸沿いに、家々を訪れて行く。以下は、海岸沿いの家を訪れる組に従った状況である。

○A家にて

「ヒャーッ、ワァー……」

ナマハゲが戸を開けて入ると、お爺さんに抱かれていた男の子が、びっくりして泣き出す。

「ゆうこと聞かッ」

と言ったナマハゲのほうが、むしろたじろぐほどの、子どもの恐れた泣き声である。

「ハア、どうも〜、ハア、ごめん〜」

と、お爺さんがあやす。

「おっかねナマハゲだなァ」

と、お婆さん。

「ゆうこと聞かねば、電話かけてくれば、いつでも来るぞッ」

「ハイ、アイ、いつでも電話かけてやるんけェ」

電話でナマハゲが呼び出せるというのだから、おもしろい。しかし、子どもはほんとうにこわがっている。

「ア、どうも、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひします」

とナマハゲが挨拶すると、

「御苦労さんです」

とお婆さんは酒をついでやる。

「サア、サ、いっぺえやってけ」

とお爺さんにすすめられて、こちらまでごちそうになる。

○B家にて

「かッちゃんゆうこと聞くあんだか、かァちゃんゆうことッ」

「ゆうこと聞か〜」

ナマハゲもだいたい調子が出たようである。それだけに面前に迫られると、小学校の低学年の男の子でも、やっぱり泣きながら従順を誓う。

「ごめんしてやってけれ。おっかねえナマハゲだなァ」

と、母親が息せき切って詫びている。

○C家にて

「ウワーッ」

「とッちゃん、いつ、かッちゃん嫁にもらたッ」

小さな子どものいない家は、大人までナマハゲに責められる。主人は苦笑しながら、なみなみと酒をついでやる。

○D家にて

「ウワーッ」

「ごめんしてください〜」

「ゆうこと聞く」

家じゅうの喧噪の中で、判別できることばは、この程度である。女の子が泣きじゃくりながら、酒をついでやる。

ナマハゲも疲れと酔いのためか、外に出ると交代し始める。服装のことについて聞くと、蓑はもうナイロンのひもで作ったもの、刀は木に銀紙を貼ったものである。以前は、三十日頃に集まって用具一式を作ったが、今はほとんど前のものを使っているのだという。お面は、なんと野球のキャッチャーがかぶる面に取付けられている。蓑の下には刺子を着ている。

○E家にて

「ウワーッ」

「イヤァッ」

「袋ッ、袋ッ」

年頃の娘さんがつかまえられる。ナマハゲも元気が出たようである。

外は強風がつめたい。そして時々、雪がちらつく。月がちょっとのぞいたかと思うと、すぐまた雲にかくれる。

○F家にて

例によって子どもは大災難。一段落して新年の挨拶、ごちそうが出る。

「サ、ナマハゲさん、御苦労さんでございました。ま、一坏やってくださいよ。雪はなかったけれど、ほんとに、たいへんでしたねえ」

「うわっと、ことしだけ、お山サ、雪あって雪あって、掻き分け掻き分け来たつとに、里サおりて来たら、雪、なーんもねえし、こ

らあ」

なにげない挨拶の会話である。もちろん平常の会話ではない。劇が生まれる場、あるいは状況というのが、ひょっとした契機にあるのだということが、こんなに身近かに実見できることに驚いた。

およそ九時頃、ナマハゲの一巡は終わった。あいかわらず西風が強く吹き、かなり冷え込んでいる。海の波が荒く音を立て、小さく軽い雪がまたちらついている。

3 秋山佐市さん（大正七年生）の話

門前のこと

(イ)戸数 ああ、現在、六十ぐらい。五十七、八か。まあ、その程度。この川からこっちが祓川。あっちは垂水。八割ぐれえ、秋山姓です。はつきりしたことわかあねえども、源氏の落人だって。ん、その落人で、ここサ、マズ、こんなジカタサ住み込んだような、それが秋山の……。そいで隣部落ぜんぜん違うもん。隣は佐々木・佐藤だ。椿サ行げばまだ、違うけども、その土地、その土地によって、まあ、ここらほとんど違うんだ。

(ロ)生業 今、月給取りで、多少公務員なってるやつは、恐らく部落で何人いるべかなあ。四、五人のもんでねえか。その人たちってゆるものは、まだ、ほんとの若手だ。我々みたいな、マジ、大正年間の子生えた人だば、ただ海相手にしてる商売で。ここらマズ、田の三反歩、昔の三反歩ぐらえ持つてる人が、五、六軒、門前で、おったん

だ。ところで、五、六軒持ってあったって、三反歩の田を耕すためには、ふつうの平らなとこの三反歩であれば、多少なりとも、マズ、自分で食うだけの、年間で食うだけでもうけるけども、この、今、見るく、こうゆうどこの、田、どこに田あるってほどの、マズ、外からちょっと見たって、わからねえぐらえ。それだけ、上サあがるってゆえば、難儀さんね。だから、今現在、田あるども、作ってる人はいね、一人もいねえ。ぜんぶやめてしまった。で、正月はやっぱり、糯米は注文して、買って。ふつう、ウルマイ（粳米）、だったって、もちろん、買わねばなんねえどもな。

(ハ)漁業 おれは、昔からの、ここの漁師。えー、今だば、ちょうど、ヤリイカの時期だい。きのうまで、沖サ出た。きのうとおつといと二日、きのうはイカ三箱ぐらえ、釣って、一箱三三〇〇円ぐらえ。それで、船の機械も、きのうちょっと故障で、じゅうぶんなことできねかったども、マズく、他の人の話だば、おれ、自身がじゅうぶんねえど思ってたども、他の人、おいとこ見るに、なんと、豪勢な海の魚釣りだ、イカ釣りだなあ、なに、こう、かけてる、って、マズ、こうゆうことゆうて、今日聞かえたども、別におれ、特別のいい餌、ってゆうわけでねえども、沖サ行って……。したから、大つきい、大謀の、あの網ではないけれども、マズ、我々、小漁師の仕事してええ、十一月から十二月にかけては、あのう、アオツリ、一本釣り。それから、今は、ヤリイカ釣り。ヤリイカは三月頃まで。我々だば、マズ、こうゆう、あれだもん、三月に、ここの、サンキョウウタ

イに、雇入れて、あのう、十月いっぱい、三月から十月いっぱい。そして、十一・十二・一・二とゆう四ヶ月は、ウチにいるもんだから、つまり、アオツリでも、ヤリイカ釣りでも、そうゆう、空き間の、人に雇わえた、余りを、マズ、自分の商売、する。ここの漁師たちてのは、休みとゆうこと、ねえわ。シケレばいつでもいいしな。今現在、今晚、きのう、おつとい、二日、出て、きょう（三十一日）は、このとおりシケでしょ。せいから、あしたも完全にシケ。あさってになって、マズ、出れるか出れねえかの、マズ、勘だ、今の天気予報、見て。せいも、だから、年中、この磯廻わりサ、ついてて、飯食ってる人は、海に出て、魚釣って、マジ、かなりな、無理な、商売しるども、我々だば、年間、ほれ、あのう、大謀サ、雇入れして。だから、マズ、わりあい、ってええ、地元、ほれ、小漁師専門にする人より、だば、無理な仕事は、しねえわけだ。そして、我々、年輩で、年金もらってるもんだから、マズ、な。それから、あのう、わりあいに、ここの、磯廻りの漁師ってものは、規模も小さく儲けも小さいもんだから、お正月も盆もねえわけだ。なぜかってええ、儲け不足だから。そのかわり海、海相手の商売だから、海シケレば、いつでもゆっくり休める。我々、日曜・祭日とゆうことはぜんぜんない。ところが、今、土曜日だけは、あのう、漁会休みだから、土曜日だけは、あの、沖サ出ねえ。そして、土曜日に出た者は、あのう、漁会に行げねえもん。行げねえから、日曜に納める。日曜に納めれば、土曜日に獲ったものは、半値より、しない。したから、自然と、土曜日は、我

我小漁師であっても、土曜日休むようんってきた。

餅搗き

ウチだば、昔から二十八日。二十八日に煤払いして、そうして午後から、餅作って。

正月の飾り物

正月しる準備とすれば、あの、結局、この神棚、飾ることは、女の手のかけることでねえために、どんなに忙しくても……。晩におそく、あのう、ふつう、ナギよければ、今晚あれだもの、今日三十一日であっても、沖サ出て行く。そうすれば、午後から、昼間までは、あのう、ウチサあがって来る。ふつう、底引きであっても、まだ我々小漁師であっても。したから、あのう、十二時から晩までかかって、マズ、こいだけの、飾って、シメナワをなつて、そして、あの、マズ、餅、必ずあげて、このとお飾り飾って。

(イ)トシナワ これはトシナワ (写真4参照)、ここてだばな。これは地元のことばであつて、シメナワでだば、日本全国どこでも……。あれはやっぱり、自分でなつたもんでなくして、あれは買ったもんだ。今も、自分でやつてけるけんども、マジ、ここサ、こう、略式で、昔は、自分の手でなう時は、床の間と、仏様と、神棚と、こい三本、自分で手でなつた。えー、昔の人たちは、とにかく入口、どこでも、入口・窓、ってゆうどこがら、マ、黴菌はいつてくるとか、まだ、それはいつたために、魔除けのもの、ってゆうな意味で、その、入口く、ぜんぶ、せいもの、はいたもんだ。それがマジ、今だば、こうして買

つたもの……。まあ、町の人だば、一つより、ここサ、神棚サやらねやつ、おら玄関サもやる。今日、暇だから、今年の新藁をもつて、三本なつて、あの、ウチに小屋あるから、小屋サ一本と、それから稲荷さんとゆう、そこにお祀り、ウチガミ様をお祀りして、それと、船と、これ三本、自分で手になつて、松・イブリー葉、あれと、せいから、マズふつうはハタハタと、喜ぶつて、コンブ、これ四つつ、せいを挟んで、七五三で、藁を七、次五、次三で、そして、ここなつて、このぐれえにして、ぜんぶ、窓十あれば十、五つあれば五つ、ぜんぶ、昔はそうして、やつた。この、なつたものサ、これと順序で、下げて、そして、別にミカンと……。こいだば、すぐ隣部落サ行けば、これが、あの、七五三でなく、ぜんぶ二本ずつの、藁で、どこまで行つても、一尋行つても二尋行つても、二本ずつの藁で、こう、やるんだ。まあ、生臭物は、昔からハタハタに決まったようなもんであるけれども、ハタハタは現在、干したもので、ないために、イワシかあるいはスルメを、ここへ挟める。

(ロ)正月の棚 (正月ノ神様ヲ迎エル棚ノ名ハ) いいえ、別に、えー、なんか、名前だば、我々、ま、付いておりません、はい。昔のウチつてものは、仏壇は、こつちにあつて、そして、あのう、床の間のほうは、こつちに、こうあるような、あの、部屋の造りであつたけれども、今あ、こうゆうふうな造りになつて、仏様の上、神棚。ここは床の間ってゆうふうだ。

(ハ)鏡餅 (丸イ餅ヲ三個重ネルノガフツウノヤリカタカ) はい、そ

うです。こちらへんだば、ほとんど、マジ、こういふうな、ええ。

(ニ)ニダマメシ (写真5参照) 今晚の、ふつうの御飯(粳米)を、あつたかい御飯で、おにぎりにして……。えーっと、昔は、これ、十二、飾ったもんだ。したども、この、戦争後に、結局、昔はその、十二飾ったおにぎりを、ぜんぶ、ほら、七日の朝まに、七草に、粥にかねばなんねもんだから、長いことには、マジ、餅と違って、あのおにぎりのやつこいやつは、ごみかかるってゆうほど、マジ、別に、あもう、それは、誰がためだってゆうわけねえ、自分なりの、あんまり、イッせてぐね、えぐねもんだから、そして、昔のように、その、粥でも、あもう、ノチョに、餅入れて、粥の、あの、おにぎりの、粥サ、雑煮、その餅を、飾った物をぜんぶ焼いて、あもう、そういにするんだから。ええ、さから、マジ、だんだん、あもう、口がこえて、おにぎりの、その、粥が、やんなってきたこと、マジ、うん。それで、そのう、おにぎりを、ふえらして、十二のやつを、ふえらしで、最初、四隅サあげて、四つつ、てゆうことは、まあ、十二の中、空間でも、十二の兼ねる。それからまな、けんざい(経済)して、ハハ、マジ、だんだん、ふすぶして、その、今、二つつに、こういふうにして、ええ。(供エルノハ神棚ト仏壇ト二個所カ)ええ、そう。我々の小せえ時分だば、神棚にも、仏のほうにも、十二てば、なんぼ小さくしたたって、けっこの飯だもの。それが、その、いっぺんに、たいてえ、その、粥サ、餅、若干混ぜて、マジ、雑煮にしては、これ、なかなか、あー、餅好きな人なばいいども、粥、この、嫌

いなくて、おらだって、粥嫌いであつた、ハッハッハ、餅、選んで食う。マジ、これは、今、現在、十二飾ってる人のは、恐らく、いねかと思う。あもう、まじめな人で四隅、ぐらい、ええ。昔なば、ちゃんど、この、上にサ、紙敷いて、そして、十二、なしてああして、箸立ててやったもんだ。(ニダマメシノ間ノ黒イ物ハ)あれは、あもう、ノリです。つまり、あもう、この、正月来る前に、ノリ採るとゆうことはねえわけ。つまり、正月に、ようやくマジ、ノリ、初物だから、珍しいもんだから、てゆうような意味、ええ。きのう、おとといたか、採って、正月に供えるために。あもう、このう、今年あたりの、暖冬の場合だば、このノリが、やっぱり、あの、寒ければ寒いほど、おがるし、ぬくいば、やっぱり、おがり、寒いもん。寒い時期の味、ってものは、ぜんぜん違うんだ、ノリは。やっぱり、寒い時期の味は、ほんとのノリの味しるし、暖冬、ことしあたり暖冬ってゆわえる、まあ、今十二月、正月が来ても、このとおりぬくいもんだから、多少には、おがるにはおがるども、味はぜんぜん違います。

(掛軸) あれは、善宝寺さん。その次は金比羅さん。うん、そういふうになって、このも、先サ、ほんとは、あもう、今の天皇陛下の、マジ、飾る、ん。我々の親たち、いたじば、飾ってあつたけども、それが、今の、この、戦争騒ぎに、天皇のあた、ねぐなつたってゆうが、まあ、去年もおれ、なんとか、天皇陛下の、一幅、マジ、いいやつ、こう、買うかなあともうて、心懸けてあつたるも、前にばっかり心懸けて、その機会になつて、とっくに忘すいちまつてハ

ア、とう／＼、買わんでしまったって。マズ、今のところ、福の神と、ア、船玉さんと、金比羅さんと、せいから、善宝寺さんの、こい、四つつ。(四幅飾ルノガフツウカ)いいえ、別に、そういわけてねえ。そのウチによって、いろいろな、やっばり、自分の信心している神様を、マジ、飾るって、ゆうな、うん。

大晦日の夕食

ふつうの人だば、たいてい、三時半頃んなれば、あのう、晩御飯だば、みんな着いてゆっくりした気持で、家族ぜんぶいっしょに、顔合わせて、年寄りはずお神酒を飲んで、やるんだけんども、ウチあたりだば、息子も公職についてるもんだから、人まとまらねんべ、今晚、ことしなんか特別で。きょうまた特別遅くて、五時。したから、あの、お盆の十三日の御飯と、この正月の、三十一日の晩とゆうものは、ほとんど昼とすぐ、昼軽くやって、晩御飯とゆうなやり方ですよ。

ナマハゲのこと

(イ)体験談 やっばり、ちょうど、あの、青年団に入ってる頃、やった。青年団でば、ここ、小学校終われば、小学校って、昔の、高等小学校終われば、青年団にすぐ入って、妻帯と同時に、たいていやめるんだけども、それから一年か二年も、マジ、つごうによって入る人もあるけども、ふつうはもう、妻帯と同時にやめてもさしつかいねえ。

んだなあ、やっばり、あのう、我々だば、今の若い者のように、高校サあるいて、ちっと、こう、他部落に、他部落でば、結局、東京あ

たりに就職して、地元に戻って来た時期の気分とゆうのは、わからない。地元にはっきり働いていて、ナマハゲの気分とゆうものは、その人たちの気持と、また別だもん。それで、やっばり、自分たちが背負って、あの、この部落のナマハゲを、マズ、やらねば、先んたってやらねばなんねえ、とゆう気分は、あるから、多少の自分の犠牲を、当然払わねばなんねえ。ああ、今晚だけでも、ねえもの。あのお面作るにしても、今年やったものはこわすってわけねえ。ある一定の場所サ納めてて、それを更に再生さねえば、こわえたとこなおして、そして、いろいろな、多少なくじりは、あるもんだ。それを、マズ、我々、この、磯廻りの海の漁師であれば、シケた時分でねば、それをマジ、修理をできねえわけだ。

この行事とすれば、特別ナマハゲする人が、こうゆう行事をして、マジ、いろいろ、あれ、やっばり、お祭に水を浴びるとか、なんか、そうゆう、行事あるところは、ここだば、特別、ナマハゲに歩く人が、どうゆう行事をさねばねえ、どうゆうお払いをさねばねえ、ってゆうことは、ないです。

上と下と、二組にこうなって、こっちは下からこう廻って、上から廻って、そこらの坂の中間の、あたりでいっしょになるように、そうゆうふうなやりかた。

(ロ)オヤナマハゲとコナマハゲ おらの年な人が、ほとんど記憶ないけれども、それよりやっばり、十年ぐれえ、おらより十年ぐれえの、年あいの人に、オヤナマハゲとコナマハゲと、ってゆうようにして

……。今のような、あの、生活ぶりではなかった、昔は。その頃は、オヤナマハゲは、あのう、五銭ぐれえの、シデ、もらうんだ。んん、お布施、そして、餅二切れずつと。五銭か十銭ぐれえの、お布施と、それから餅二切れと。それが、コナマハゲってゆうのは、小学校の尋常六年か、その頃恐らく、高等科ってねかっただろうと思う、六年程度の奴が、組っこになって、ナマハゲの面を大人の人からこしらってもらって、そして、広東袋、あればほんとう、広東から来た広東米が入った広東袋であって、そいで広東袋ってゆうもんだ。それに、その、シダ餅、入れてもらった。

シダ餅ってえばな、今の、まっ白な、ふつう、白米でこしらったものは、シマ餅、て、ゆうわけだ。んーんと、モチマイ（糯米）で作ったものはシマ餅。それからウルマイで作った餅に、あの、ヨモギを入れて、作ったものが、シダ餅で言った。それが、ウルマイサ、あのう、ヨモギの青いやつを採って、乾燥しておいて、今、その、ふかしでいる、そいといっしょに搗いたものが、シダ餅と言った。それだけやっぱり、今の生活と昔の生活と……。今ならば、そのシダ餅ってやつが、誰も口にする人、いねえ。ウチの婆は、八十四、五であって、その味を、ヨモギの味を忘えらえねもんだために、あの、特別にマズ搗いて、そして、米そのものより、それにヨモギ入れることによつて、餅のアシついてば、わかるが、ねばりついて、そうゆうことが忘れねえで、やっぱり自分で骨折って、ああゆう八十以上もなってるもんだために、ヨモギ、山から採って来る、娘たち、そこらで嫁になっ

た人からもらって来て、そして、作ってる。

(ハ)膳の物（写真6参照）これは、マズ、特別、こうだつてことはねえんども、これは、ホウボウってゆう、ハイ。この魚（煮付け）は、いい魚あればいい魚、ふつうタラ・ホッケ・スケソウ、そんなもんだ。あとは、サツマイモ・ニンジン・コンニャク・シイタケ、に、コソブと。豆、は、特別、なんとゆう、わけだばねえな。ふつうの煮豆。ナマス。

(ニ)紋付姿の孫がお酌をする あれ、四歳、五歳。あの年あいに、特別に着せるってわけだねえんども、あの紋付は、まだ生まれてから、あれ、今、始めたもんだ。その前に、二歳、満一歳だか、に着る着物、は、もう一回着て、そして、あの、その時分だば、ナマハゲ、まだ、おっかねえってわかんねえ時分に、ナマハゲサ、おれ、お酒つぐって、そして、行って、あの、シシについて。そい、今だば、ヨツミの、今年初めて出たんだか、今度、おっかな味、わかるもんだから、はあつてな、三十一日ん日、ナマハゲ来るってえば、おれ、悪いことしゃねてば、お爺さん、おれとお袋サ付いて行ごうかって、これ、そうして、いたんだ。したか、なんも悪いこと、しゃあねば、ナマハゲとゆうもん、そこらにちゃんと、周囲に聞いているんだから、ふだん悪いことすれば、そこらに聞いてて、ちゃんと耳サ入って、そのう、あのう、連れて行かれるんだから。悪いこと、しゃあねければ、なんも、心配することはねえ、ハッハッハア、まあ、こうゆう言い方で……。 (子ドモガ酒ラツグノガフツウノヤリカタカ) ええ、別に、そ

うゆうわけんだば、ねえんども、つまり、あのう、悪いことしねえから、お酒ついで、あのう、ナマハゲサ、こんとおり、ゆうこと聞くから、ってゆう意味で……。

神参り

それから今度、ウチあたりだば、ナマハゲの余り、来るんだあ。五、六人、七、八人ぐれえ、ぜんぶ集まって、ここサへ来て、今度は十二時や一時まで、あれして、そら十二時になった、一時になった、神参りしるって、ゆう人は、おらまあ行くって……。 (ドコマデ) こだば、あの、五社堂。お餅持って、賽銭持って、蠟燭立てて、そしてお参りして、そして、帰りに、今のお寺に、自分の先祖がいるもんだために、お餅飾って、そしてやっぱり拜んで。(参道ノ落葉樹ハ) えーっと、左側の大きい木はブナ、それから右側の小せえ、あの木は、カシワだの……。

元旦

ふん、マズ、今晚の十二時過ぎにそういふうに行けば、あしたの朝は、ゆっくり寝る。ここらだば、恐らく、あの、朝のごちそうってものは、トロロイモ、トロロ汁、そんなもんだ、うん。お雑煮ってゆうのは、ここだば、あいだもの、七日。七日の朝。(夕食ハ) んん、それ、特別ねえな。

七日 七日で、この神棚をぜんぶといて、しまう時、七日の朝、鏡餅をぜんぶ焼いて、そして、そのニダマメシとゆうものを、粥にたいて、それからダシとった、コンブでダシとったやつへ、さあ、あの餅

焼いたやつを入れて、それをまず神棚サあげて、自分もいただく。

4 菅原常雄さん(大正八年生)と小玉留吉さん(明治三十三年生)の話

門前のこと

(イ)地名の由来 門前とゆうのはね、これ、あのう、寺、ほれ、永禅院とゆう寺が、佐竹侯の祈禱寺であったもんだから、ですね。そして、いくらか禄もらってね。この村は、その当時は、十三戸しかなかったんだ。

(ロ)発展問題 今は六十軒だけれど、最近が、どんどんと、この部落で、分家が増えてもね、あのう、宅地がないもんですから、みんなよそへもう分家になって、転出してしまおうとゆうもんですね。そいだけに、その、部落の、いわゆる繁昌も遅れたり、勢力がなければね、えー、まあ、事業も、市からも県からもいただけないとゆうことで、すべてが、この、都市からみれば、仕事が遅れて、非常にその……。あるいは宅地がないことによっては、ガス引っぱってくるにも難儀したし、電気の高圧線なんかもまだ未解決のままに終わってるとゆうことは、いわゆる人口が少ないだけにですね、非常にまあ、困っているわけなんです。そうゆうこともからめて、門前の発展、この土地の発展とゆうものは、もう少し、ね、人口の密度が大きくなって、そして、そのう、別家になる次男坊、三男坊を、ここへとどめておく、土地がほしいとゆうことで。でまあ、最近、バイパス道路をかける計画を、立ててるわけなんです。んだどもまあ、こうゆうふうな、自然

(甲) フナムカエの神供 これ、お米はね、私らが今、船玉さんを迎

えるとうゆのはね、人間だけ年取っても、いただいて、ありがたいと
ゆう、でなくして、船にも年取ってもらおうと。船の年取りの場合に
ね、船サもまんまかせるゆう意味だ、マズ、ね。かならず米あげて
ね、本来なれば、神主から拜んでもらうのがたてまえだけれど。こ
れ、フナムカエとゆうて、船に年取ってもらうために、これ、あの、
持ってってきた、そのままのものを、あげてね。こりやまあ、あの
う、一週間、このままにして、いっしょに、あの、祝ってもらおう、ま
あ、楽しんでらう。そうして、あの、大漁するように、努力しても
らう。船玉さんのおかげで、今年無事に大漁させていただいたと、ま
た新しい年もひとつ、まあ、大漁するような、ね。私らを乗せてね、
安全の操業をさせてくださいとゆうって、こう、拜んでくるあんだ。

(一升榊ニ入レルノハ) これはまあ、昔から、一升榊だな。(米ト酒
ト丸餅一個ト) 本来なれば、これサ、ハタハタがあつてね。乾燥した
ものあれば、メザシとかコンブとかゆうものも、いっしょに、こう入
れてね、行くわけなんですけれど、今年はハタハタなかったもんだか
ら。(コノ葉ハ) これ、おらほうでは、イヅの葉と言ってる。イジヨ
ウの葉とも言ってるしね。ま、ここの人がた、イジヨウの葉と言っ
てるども、山にあるんだ。そうとう深い山でなければ、ないわけなん
ス。年中、青くなってるの、これは。枯れるとゆうこと、ねえ。こ
れ、節はあるけれどね。年はたしかにいただいて取るけれど、いつま
でも若くなつてもらいたいとゆうこと。(ナマハゲノ餅ノモ)

あ、おんなしですよ。

(乙) 掛け軸 (写真8参照) 私らのほうですね、これ(高砂の尉ト姥ノ
図柄ノモノ)はマズ、御祝儀にあらすですよ、トシノイワイ(年の祝
い)とか還暦の祝いだとか、あるいはあれだすな、六十一になるとゆ
うと、おいの家内とまた、ふたたび結婚の銀婚式やるスもな。そうゆ
うめに使うので、え、これは用いているので、この掛け軸はぜひ、
一軒に一本ずつ、なければいけないものようだ、わけなんですよ、
昔からね。

これはまあ、あのう、竜神さんと言って、これ、山形の神様なん
ですよ。山形県(鶴岡市下川)の善宝寺さんの掛け物ですね。りっぱな
お寺さんで、この神様とゆう、仏さんと言えばいいか、まあ、竜神さ
んで、神様でしょう。神様がね、ほんとうに、船が、座礁した場合に、
我々漁師が、この神様サ、願を懸けて、ぜひ、あのう、船にね、あの
う、損傷なくして、無事に、そのう、離陸してもらいたいとゆう、そ
のう、おろしていただきたいと、こうゆうふうな願懸けるとゆうと、
すぐにも、その、船が満潮時にすね、この時間に、なんなく、曳航
してもらいなさいと、引っぱってもらいなさいと、善宝寺さんのお知
らせがある時期に、これ、これがいわゆるその、干潮と満潮の、満ち
干をね、じゅうぶん、統計的に見たうえにおいて、善宝寺さんが、座
礁した船をおろしてもらうために、この神様を祀っているとゆうこと
です。これ、我々、一般に、あのう、通常、漁師の神様、水の神様。い
わゆる、その、これは、海水・淡水をとわず、水の神様として、我々

は漁師で生きるもんだんですから、水を相手にして、板子一枚底って、水を相手の商売だから、漁師の神様として……。山形県のね、善宝寺と言えば、マズ、商売繁昌・海上安全、そうしたものに御利益ありとして、有名な寺なんです。りっぱなもんですよ。マズ、ここの人ならば、善宝寺とゆう、一つの大きな組織まで作ってるスよ。

これはまあ、例の、我々のね、わたしらの生まれ故郷にある、これ、今年、年賀状の切手にもあったナマハゲですよ。これは五社堂へ行ってみるとゆうと、こうゆう杉が、これまあ、今から、だいたい六百年ぐらいの、ね、古木。倒れてますよ、風にね、倒さえて、中は腐ってしまったね。

これはあのね、赤神さんとゆう、我々がこれ、私らのほうの門前の、部落の神様なんで、実際、この、赤神さんとゆうね、神様は、女なんですよ、これが神様なんですよ。これはまあ、侍従で、率いて行くけれども、これは、これ今、神様が使い者に指示しているとこの姿だ、わけなんで、あくまでも、赤神さんとゆうのは女の神様だわけなんで……。まあ、これ、ね、大山神とゆう、こう言ってるわけだけれどね、これは山の神様って、これはあくまでも、女が神様。これは私のほうの赤神さんとゆう、これ、オブスナだわけなんです。この神様はね、どうゆういわれなのか、むこうの、真山サ行っても赤神神社ですよ。これはまあ、めおと神社でなく、きょうだい神社だと、こう（官司へ）おっしゃっておりますね。姉と妹だとゆうことおっしゃってます。真山のほうが妹さんで、本山のほうがお姉さんだと、こ

うおっしゃっておるけれども、どうゆうわけで赤神さんとゆうことだろうか、私もわかりませんが……。由来がですね、流さえて、漂流したものでしょうとゆう、こともゆうてる。インドから来たとゆうことも言ってるしね、いろ／＼まあ、説が二つも三つもありますけど、どちらをとっていいのか。流れて来たことは確かですよ。こんなのは、日本の国にだば、直接生えたもんでないですよ。武将でもねえし、弁天さんでもないし、羽衣でもなんもないの。流れて来たってゆうことで、ここに、その、たどり着いたのが、神様に祀らえたとゆうのは、確かな伝説だ。今からやっぱり、六百年、以上の、ものだとゆうことだけだば、まあ、みながら言ってるから、あれだすべもの。

ナマハゲのこと

(1)昔のようす やっぱりおんなじだ。桶を持って。ワラジ、こうゆうおっきいワラジ、作て、ここサ着ける。お山からさがって来た時、ワラジはいてさがって来たもんだ。(ナマハゲニナルタメニ山ニ籠ルヨウナコトハ)え、なかったスな。(腰ニ着ケルモノノ名ハ)ナマハゲのマエカケ。(着ル物ハ)スボとゆう。侍の鎧甲かぶったように見えるって、昔の人がた、糸くずに、よりかけてな、それ、おうたやつ、それこんど、着物にして、着たり……。 (ソノ上ニ蓑ミタイノヲ着ル)んだ、んだ。お面はあれ、山の、まあ、ケヤキのえだ木の、皮よ、はんでよ、しっかりこしらって。それも、ベン付けて、鬼だもの、赤くするとこだば赤くする、青くなあ青くするスな。(人数ハ)六人だよ。オヤとコと分えて。オヤナマハゲ・コナマハゲと。あれ、

主人サ、挨拶サすが、中へはえってやるのがオヤナマハゲ。

(ロ)資格 やはり学校終えて。昔、ワケエモン時代は、やっばり三十なんぼになるまでは、んだな。四十もなるまで、昔の人は……。ワカイモノナカマ、ワカイモノ、とこう言ってるんだ。そうして、ワカイモノガシラとゆって、今の青年会長みたいな者が、先にいて、その人の支配に入ってるという……。学校終わって、十六、七になれば、まあ、ワカイモンだなあ。まあ、三十五、六、くらいまでだ、やっばりな。嫁さんもらっても、やっばりまだワカイモンだ。

(イ)語義 ナマミをはぐとゆうのはね、昔の人がたが、今みたいに、その、りっぱなものを身に着けておらんもんで、えー、冬になるとゆうと、さぶいば、こうゆうふうにな、焚火サ、足あぶったり手あぶったりして、ほとんど、おめえ、着物なんかだって素朴なもんであったからよ、寒くてどうもならなければ、足のスネにその、ヒガタが付くとゆうことですね、アブリガタ。そうゆうように、ナマミをとゆうたもんだもんね。それがいわゆる、その、さびなつて、かろこねあんで、動かねでいるから、そうだんだと、働く人うちゆうものはね、あつたていなくとも、働く運動によって、セエ、まあ、体がセエ、あつたまるんだと、ぬくくなってるんだと。それ、動きたくねえ人、仕事のしたくねえ人にかぎって、その、火の端に、そうゆうヒガタが付くとゆう、それを、まあ、一年の一回の、大晦日の行事に、カラッポネアミいるか、ナマミハギ、とゆうのが、ナマハゲと、こうゆうふうにな、まあ、命名されたと、ゆうとおりにですよ。カラッポネアミとゆうの

は、昔はやっばり、生活んならない、いちばん、その、ね、人生において……。動きたくない、仕事したくないとゆう人、カラッポネアミとゆってるがど。カラッポネアミとゆうことは、ほねやみゆうことは、いわゆる、その、あたってバス、こうやってさぶがつてえすよ、体動かさねば、なおさぶいすべエ。したがってこうゆうとこサいるとゆうと、昔は今みたいに、毛糸のセエ、下モモ、へ、このう、間の手がいれるわけが、ズボン下なんて、ねえもんだから、このスネからつんだし、こうやって、この、マカンブルーやって、セエ、大きなろりの中サ、こうやって、この、さびがつてセエ、こうやって、こんなかつこうしていれば、これサこんど、カタチンバみたいだもんだもの、その、あれを、戒めるとゆうか、はぐと、取ってしまうと、んだ、カタをね。そうゆうこと、ね。ほんとうに昔の人がたは、その、ここの人とゆうものは、労働で、きたえて、労働で生き、労働で死んでいかなければならぬ、その、へんびな土地だけに、ね、頭で御飯食べれるような人なんか、一人もいねかつたんですよ。マズ、ほんとにみすばらしいもんであった。よく火事出さねで生活したもんですよ。アバラもカヤ、屋根もカヤだよ。

(ニ)起源譚 それだばねえな。いつから始まったか、おらあ、前ねからあつたんだもの、わからねえな。

いつ頃から始まって、いつ頃から、こうゆういわれ、因縁とゆうものが伝説されたか、やはり今から六百年も前の、いわゆる漢の武帝だなんて、ああゆう時代から、ですね、この、神様自体も、その、ここ

に存在したものでなくして、流えて来て、神様に祀らえたというくらいなんだからですね、これはやはり、ちょっと、今の八十、九十になる人だって、ぜんぜんわかりませんよ。

赤神さんの祭

そんなに大きな行事というのは、この部落としてはなかったスな。ということは、祭はたしかに、これはもう唄にもございますように、男鹿小唄だか、にもあるとおり、夏祭、というところで、有名だわけなんです。ところが、ごく最近、今から七、八年前にね、船川の神明社の、五月二十一日のお祭に合併することで、このいずれの海岸通りの部落が協議した結果、一致した意見でもって、そして、昔からの七月十五日という夏祭りの、門前の赤神さんのお祭というものは、なくしてしまったわけなんです。まったくないわけではない、いちおう、形だけは残っているけれど、ほとんどないも同然だわけですよ。その当時やはり、赤神さんの祭だというところ、近郷近在には夏の盛りの時に夏祭というのは、門前だけであったわけですよ。文化の発祥地とされる門前だけにかぎられてやったわけなんです。そうするとゆうと、親子・信者とゆうものは、ぜんぶ門前の祭を見に来て、たいした賑わったもんなんですよ。この、赤神神社でお祭をやって、この浜サ槽ついでですね、道路のほうから、こう見るように……。

降雪のこと

雪は、ここはあいだな、積雪なんてゆうものは、ぜんぜん、マズ、

考えねえでもええな。冬なって、雪積もって困るなんてことは、まあ、ひとつちに、ふたきりもみいきりもあんべか。この、雪べらで雪かきかけて、こう、ウチから外へ出入りして、沖合の状態見たり、船見たりするとゆうことは、ふたあきりもあるでしょうか。降ったたつて、すぐ解けてしまつて。沿岸のはね、海水の温度のために、あつたか味のために。

おわりに

ナマハゲの来訪する民俗行事は、男鹿半島を中心に秋田県下の多くの土地で、今もなお実修されている。そしてその概要も纏められつつある。一方で観光化されたものもあり、また形骸化あるいはまったく消滅したものもある。しかし、それを嘆いてもしかたがない。民俗は結局、人とともにあるのだから。ここにこうした形で採訪結果を纏めたのも、門前のナマハゲが、その風土と生活の中で、かつてどのように伝えられ、今日どうあるかを、少しでも見極めたかったからである。そして、考察はこの後に始まることになる。

これはもと、昭和五十四年度跡見学園特別研究助成費の交付を受けた、「雪国の来訪神についての研究」の一部をなすものである。初め、「来訪神」の概念を少し広げて、「雪の神と祭」「白鳥に関する伝承」「養蚕についての信仰」「白山信仰」「年中行事に見られる来訪神」という項目を立ててみた。そして、それぞれに触れて採訪も続けてきた。たとえば、「大日堂の舞楽」を中心とした米代川の流域文化、山形県

遊佐町のアマハゲ、石川県柳田村のアエノコト、蔵王東麓の白鳥信仰などである。また、別の機会に、宮城県米川のミヅカブリ、岩手県遠野市のオシラサマ、新潟県中越地方の小正月行事、石川県門前町のアマメハギ、同白峰村の白山信仰、長野県新野の雪祭等も採訪した。それらの結果を一括して報告する予定であったが、膨大な紙数となるため、後日に譲ることとした。